

梅木昭和氏 提供原稿

—「地域記録集 土佐の村々4」編集過程において—

つらおは谷底である。それでも夏は白濁りは長い。しかし冬には三時頃になると西の家から冷えて来る。物心がついた四五才位になると坂道を登ってやせでも空が開けた所へ行つてみたかと思ふものだ。家の後の山頂にある芋畠に上ると海が見える。広い世界が見渡せる。そこには茨がありその手前には沢山の店が並ぶ。商店街がある。話を聞いて知つてゐる。そこで行けば欲しい物を買つてもらえかも知れない。子法心は弾みと食欲を連れて行つて親にせがんだ。貧しい地区の人々が山を降りて和信の方へ行くのを夜行きと言つた。こゝへ行つての買物は必要最小限の物だけを、沢山の物を買える。訳では無い。子供に何時もみせりに連れて行くのを買つて帰れない。それでも一人で登つて行つた母親の帰るのを何時も待ち、待ちくたせ、坂道を登り、此まで行つたことが多かった。親の不在の寂しさとおみやげへの期待もかへり交つた。何とも言えない。夏分の山と時がどうにかあつたと記憶している。

母親は時々、何とも子供に買物をして帰れるようにと、前日にツレでも授金できそう、な野苺や、山菜等を用意してふたに入れて、オルクに前後に担い、早の山道を下り、家々を廻つて、売り捌き、その後で買物の品定めにかかると、家族みんなに必要のない買物の代金は家長である祖父か、主人より預かつた金で買ひ、残り物で得た金は普通は母親の、昔下り代金として、先づ子供に買つてやり、必要物の代金として、最後に残つた金が子供へのおみやげ代となる。子供を連れて、夜へ行くと、なれば、行つた先でせがまされて夏ならアイキヤデー(昔はきょうきょう)がかき水を運ぶつてやりたし、暑く、なる前には夏用の帽子も買おわねばならぬので、それなりの覚悟で山を下り、なるとなる。

山で暮す人々、誰ぞも大なり、なるとなる。

又、帰り道、大変だ、まき口位を過ぎると、なるとなる。

注：ふじ、葉を編んで作った四手の入れ物、物を運ぶ便利な道具

DATE 1.2.17

▲梅木氏の手書き原稿

提供期間：令和元年（2019）5月～令和2年（2020）7月
梅木昭和氏：昭和4年（1929）生まれ（91歳）。香美郡東川村久重ツツラオ出身

1, 久重の暮らし

(1) ツヅラオ

つづらおは谷底である。それでも夏は日当りは良い。しかし冬には3時頃になると西の家から陰って来る。物心がついた4~5才位になると、坂道を登って、少しでも空が開けた所へ行ってみたいと思ったものだ。家の後の山頂にある芋畠に上ると海が見える。広い世界が見渡せる。そこには浜があり、その手前には沢山の店が並ぶ商店街があると、話を聞いて知っている。そこに行けば欲しい物を買ってもらえるかも知れないと、子供心は弾み「和食へ連れて行って」と親にせがんだ。

貧しい地区の人々が、山を降りて和食の方へ行くのを「浜行き」と言った。ここへ行っての買物は必要最小限の物だけで、沢山の物を買える訳では無い。子供に何時もみやげに菓子などを買って帰れない。それでも一人で浜へ行った母親の帰るのを何時も待ち、待ちくたびれて、坂道を登り、峠まで行ったことが多かった。親の不在の寂しさと、おみやげへの期待とが入り交った、何とも言えない気分のひと時が、そこにあったと記憶している。

母親は時々、何とか子供に買物をして帰れるようにと、前日に少しでも換金できそうな野菜や、山菜等を用意して「ふご」に入れて、オークに前後に担い、里の山道を下りる。家々を廻って、売り捌き、その後で買物の品定めにかかる。家族みんなに必要な買物の代金は、家長である祖父か、主人より預かった金で買い、売り物で得た金は普通は、母親の小遣いの金として、先ず子供に買ってやりたい必要品の代金とし、最後に残った分が子供達へのみやげ代となるのだ。子供を連れて、浜へ行くとなれば、行った先でせがまれて夏ならアイスキャンデー（昔はこう言った）か、かき氷を買ってやりたいし、暑くなる前には夏用の帽子も買わねばならないので、それなりの覚悟で山を下りることになる。山で暮す人々は誰でも大なり小なり同じだ。

又、帰り道が大変だ。1.5キロ位を過ぎると殆ど登りだ。小さい子供を連れて行くと、途中で「おんぶして」となる。二人の親と行った時、私もこう言って父の背で坂道を上った経験がある。馬ノ上の家並を過ぎ上って行くと大休場（オオヤスバ）と言う坂の頂上の広場でひと休みする。ここからしばらくは起伏の少ない道が続く角石の下から又坂道がある。この後は割合楽に通れるが、馬床の峠を過ぎると、又三度谷へ下り三度上ってやっとチガヤの峠に着く。昭和12~3年頃より馬床—チガヤ峠の間に広い道路が通って、完成後はこの間の道が平坦になって随分楽に通れるし、時間も短縮されて皆が喜んだ。この後、担って行った「浜行き」が、リヤカーになり、和食から物を運べる荷馬車（貨車引きと言った）の時代になり、太平洋戦争に突入した頃で、私は小学校6年生になっていた。

チガヤ峠から和食迄道路が通っても、各戸に自転車やリヤカーがある訳では無く、相変らず歩くのが殆どで馬床—馬ノ上間は従来通りの尾根を通る山道で、芸西高等小学校に2年間通う生徒は大体2時間かけて、通学し、女子は下宿する子も相変らずいたようだ。

昭和23年春から新学制となり高等小学校（2年）は新制中学（3年）に変わった。この後は年々変化が激しく、中学に通う子供は次第に自転車通学となり、昔、里の道を徒歩で、草履ばきで走るように山道を下りたことがウソのような時代に一時はなったが、高度成長と言われ始めた昭和30年代後半からは過疎の波がこの地に押し寄せて来て、残念ながら……

注 ふご…藁を編んで作った四ツ手の入れ物。作物を運ぶ便利な道具
オーク…天秤棒（オークは櫓か、英語から来ているか）

我が家の事を少し書いてみる。父の兄弟姉妹は、男2人女3人（この他男2人夭折）末弟（私の叔父）は大正10年生れであった。私の兄弟、姉大正13年生、私昭和4年生、弟昭和6年生、末弟昭和10年生、この中で叔父、私、末弟3人しか進学（旧姓中学校）させてもらえなかった。姉と弟は高等小学校卒である。

この当時の我が家は戸主（家長）は祖父で昭和17年他界したが、その後は父が戸主となった。（戦中迄の法律では戸主は家族制度の中で中心的な力を持っていた。）経済力の弱いこの地区では、中学校に行けるのは10%あるか無しで、行く為にはそれ相当の金が必要で、父の出稼の外、養蚕やみかん作りをしていた。当然炭焼きもして、私自身、少しは休みの日に手伝いをした記憶がある。母はしきりに進学をすすめ、公務員（昔は役人と言った）か軍人になる事を望み、身を粉にして働いた。残念なことに私が高卒で就職した翌年、52才の若さで他界した。

叔父、私、末弟の3人を進学させ、高知で下宿させて、育てた「付け」を一身に背負ったのは母だと今も忘れることは出来ない。又、我々の進学の為に、家を支える役割に立ち、自身の進学はあきらめざるを得なかった、姉と弟には何時も申し訳ないと心の中で詫びていた。今でも感謝の心でいることに変わりはない。

下宿 戦前には中学校（女子は高等女学校）に進学した、家から通学出来ない生徒は、寄宿舍の無い学校の場合、殆ど部屋に余裕のある家で食事付きの部屋借りをして学校に通った。高知市内には沢山の下宿屋があった。

つづらおを最後に出た人は茂井登志恵さん（平成元年8月25日没）。昭和52年に次男（家を継いだ人）夫妻とともに芸西村西分に移住したが、その後もほとんど元のつづらおに行き畠作業をして暮らしていた。最終的にこれを終えたのが昭和60年（月日は不明）頃と思う。昭和61年より病氣入院後に亡くなった。（次男の妻談）

（2）炭焼き

久重の炭焼きは相当古くからと思われるが、道路が整備されていない時代「浜」まで運ぶ手段は牛馬しかないし、更にその前の山々、谷々の炭窯から久重と和食に通じる幹線道の集積地迄運び出す作業の過酷さは相当なものと推測される。

ただ林業では針葉樹林（植林）は育つ迄に長期間を要し、一代（約30年の世代）で考えても、二～三代は少なくとも金にはならないが、炭焼きなら、30～35年で木を伐る事が出来るメリットがあったと思われる。

◎炭焼きの手伝い

毎日ではできないが、冬場の連休や冬休、春休

- 1、炭俵の運搬
- 2、伐採した原木の運搬及関連作業
 - 集めた原木を谷状の傾斜地から落す作業
 - その木を又炭窯迄担いで運ぶ
 - 火入れした窯の火の見守り

(3) 養蚕

祖父は養蚕の世話役であった。私が物心がついた頃、我が家には二階建の家に蚕室があった。つづらおでは3～4軒が飼っていたと思う。卵の目方で、10、20、30、50等グラム単位で飼う量を決めていたように記憶している。その為の計量用の精巧な天秤が家に在った。

子供が手伝いするのは道具類の準備や掃除。

- 1、エビラ……木杵に竹（孟宗竹）の皮を除いた部分を十文字に組んだ筵状の物を取り付けた道具。
これに桑の葉を乗せて、蚕の幼虫を放して育てる。
- 2、蜂の巣（はちのす）……蚕が繭をする前の状態迄成長した段階（イリコと言った）でこの器具の穴に入れて、繭を作らせる道具。
- 3、マブシ……2、同様成長した蚕を入れて、繭を作らせる道具。藁製。
※芸西村文化資料館に1～3は保管されている。

◎養蚕の手伝い

- 1、のエビラを川まで運び数時間水に漬けて付着した糞尿を洗い流して乾かし、家迄運ぶ。…子供にとって重労働である。
- 2、蜂の巣に付着した蚕糸、ゴミ等を取る器具がある。平板に針状の金具を立てた物を手動で回転させて取り除き、蚕を入れられる状態に戻す作業。
- 3、マブシは手作業で使える状態に戻す。

(4) 水汲み

釣井（つるい）から水を汲むのは子供の役割の家が4軒あった。勿論大人が汲んだが、学校から帰って来たら先ず水汲みする子が多かった。向かいの山の谷より竹の樋で水を引いたのは、本家筋に当たる3軒のみで、この労働が子供の力に頼る、山の暮らしの厳しさを感じたもので、子供心にかわいそうだと思ったものだ。

(5) 草履作り

○藁を打つ

○草履を作る（編む作業）

戦時中は殆ど運動靴（ズック靴と言った）無い。小学4年生位になると自分の日常履く草履は全部自分で作った。休日が主で、週に平均2足は必要で、常に1足の予備が残るようにした。

(6) 宮相撲

戦前はあちこちで、相撲も盛んにとっていて所謂、宮相撲である。久重地区でも道家の星神社、久重のオソゴエ地蔵の境内でも行われていて、私も小さい頃ここで取ったことがある。

又、仁井田神社では紀元二千六百年の国を挙げての行事として、浦安の舞を当時の青年団の女子が舞って奉納した。これは多分全国的な行事だったと思う。この舞については「広辞苑」にも記載がある。2600年は1940年、昭和15年、私は小学5年生である。

この日仁井田神社では現在の駐車場となっている田圃に土俵を作り近在の若者を集めて（小学生も参加）記念相撲を取った。久重のこの当時、横綱級の力士は谷山良水氏（谷山雅清氏の父親）で、近在から参加して来る人達の誰も敵わない位強かった。

(7) 道家・白木山と久重の関係

久重は五名の他に、隣接して道家、国光（白木山）があり、私達の知る限り祖父母くらいの時代まで考えてみても、この二集落は久重五名とは一体の関係にあるという認識。国光は、上が国光、下に久重分（大屋敷分）の3軒（ヌタ・桑木・入道石）があつて上下合わせて白木山と言つた。

当然学制施行後は久重小学校に皆通い、婚姻関係も多く、交流は長く続いた歴史もあるが、戦国あるいは江戸時代からの政治的区分とも言う勢力争いによる分け方が続いた為と考えられている。

白木山を最後に出た人は坂本幸八郎さん（昭和8年生まれ）。平成27年12月15日頃。

道家の神楽の最終奉納日は、昭和43年らしい。神楽伝承館は平成3年建設とのこと。

(8) 出稼者・移住者の話

久重は地形から解る様に、生活するのに困難の多い土地であつた事は間違いない。つづらおと加重の人達は家の周辺の外に、西の方の谷々沿いに下流、馬ノ上（芸西村）の境あたりまでを開き、水の利用可能な限り水田にして、その上の方に更に畠を作って耕作していたと思われる。宇留志・板淵は更に、水田は少なかった地形で、困難な暮らしぶりが想像される。こうした状況から、国内外への出稼ぎや海外移民があつた。海外（アメリカ）へは定住組と出稼ぎ組があつた。

○定住者 安芸友、梅木（終戦後一時帰国）

山内某（終戦後移民数人）

○出稼者 梅木芳松（田中茂太郎氏の祖父）

山内（名は不明。医師の父か？）

私は物心ついた頃から、13才位迄しか久重に定住せず、旧制中学時代の19才位頃は春・夏・冬休みに帰って来ていたので、この頃の事についてはまだ少し記憶があるが、90才ともなると定かとはいいかねる。

父・母・私3人で5～6才頃、多分農閑期と思うが、魚梁瀬の国有林伐採作業員として行く父に付いて行った。(母は「かしき」・・・食事係員)私が小学1年の年には弟が行った。父達(久重地区から相当数の人数の人が行く)は、これ以前にも行っていたかも・・・

更に父は日中戦争中、旧満州国(中国東北)の旧ソ満国境の地に軍の関係する建設工事の親方をしていた加重出身の谷山氏(谷山雅清氏の伯父)の要請で現場監督として雇われ行っていた。一度帰国後再度行ったと思う。酷寒の地にそれも冬期に行った。給料は国内より相当多かった為と思われる。

その他にもつづらおから、長期出稼の人が1人いた。新居浜へ住友系の会社の仕事のようにだった。話上手なおんちゃんて帰宅時の話は面白かった記憶がある。

これ等の一連の出稼は此の地の人達が農作業(山仕事も含め)だけでは生活が立ちゆかない為だったと思われる。それ故外地は大陸(中国・朝鮮等)にも行った。親戚(道家・羽尾)も行っていて、年に一度位帰国して、私の家に来た。

こう言う社会状況を子供の頃から見聞きしていたので、久重を出て、外に行き、農業以外の仕事をしたいと考えるのは当然であり、現に叔父(父の末弟)は中卒で、中国へ渡っていた。(後応召、19年戦死)話は前後するが、大屋敷出身で魚梁瀬に行き、永住している人もいる。

(9) 父の満州出稼時代の資料

居住証明書(昔は証明書)と当時の満州で撮影された写真(15.5×20.5センチ)がある。

この時代、これだけ大きい(広い)集合写真は珍しい。谷山雅清さんの伯父さん、お父さんの上の兄さん、谷山祐永さんと私の父との間に日本人が1人、この人がこの会社(?)の代表者か、又は国の関係者かは不明だが、日本人は中央の3人のみで、後は現地民。現地民は「クリイ」と呼ばれた労働者。この時代は日本では労働者を土方と呼んでいた。父の後列にも若い日本人らしい顔が見えるが、これも不明。

父の満州行きは当時の国鉄後免駅まで母と弟の3人で見送りに行った記憶がある。弟の話ではこの駅で、貨車に西瓜を投げ入れて積込みしていたとの話で、多分田植を終えて(梅雨の後か)初夏7月頃の事では無いか。

証明書の有効期間 康徳8年3月1日(昭和16)

康徳10年11月30日(昭和18)

この間に

康徳8年3月8日(昭和16)

康徳9年3月7日(昭和17)

} 1年間

この間に一度帰省している。

従って、最初の渡満は昭和15年7月頃ではないか、そして昭和16年の春に一度帰省したと思

う。(帰省の折必要で申請～発行された物か) 何れにしてもこの当時は日中戦争の最中。久重でも多数の出征兵士は出ていて、大陸へ渡ることについては、誰もが危険は覚悟していた時代の事で、父は兵役はまぬがれていたので、この出稼が出来た訳である。

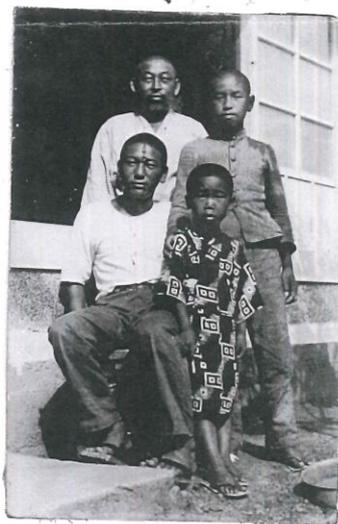


S:10年頃

ツツラオ遠景



26.11.4



S 10年頃
和服の母と6ヶ月



父の滿州出張時代の一枚現す
この時代長とまゝあゝなむ心算直とは



梅木家（昭和29年9月頃）

2, 戦争の記憶

(1) 昭和20年7月の高知大空襲の夜

昭和18年の春、私は旧制中学に入学し、高知市北奉公人町で下宿して、学校に通っていた。升形の電停から北へ150メートル位行った所で円満橋の少し南の所である。20年春頃には戦争は敗色濃厚の様相で、東京、大阪、名古屋と大都市は次々と大空襲を受け米軍は本土に迫り、硫黄島や沖繩に上陸作戦を敢行して、本土上陸も近いのではと思う戦況であった。近海迄迫っていた空母より艦載機が毎日のように飛来して日章の海軍航空隊を襲っていたし、時には私の通う学校にも機銃掃射を浴びせたりしていた。その折の葉莢を拾ったこともある。まさに高知も戦場となる寸前で、我々中学生も学業そちのけで陸軍の本土決戦に備える為の陣地構築作業に駆り出されていた。五台山の南面の山の中腹に穴を掘り陣地を造る作業の手伝いである。

7月3日の夜、午後11時頃、空襲警報が出されたが、直ぐ解除となった。間もなく、又警報があり、今度はいつもの町内の空地に作ってある防空壕に急行した。寝巻きの浴衣姿だったと記憶している。しばらくすると、外の音が普段と違くと、外を見て来た人達が言いだした。そして町内会の役員の人らしい大声がして「焼夷弾らしい、このままここにいたら焼け死ぬぞ」と叫び、皆に早く逃げろと促した。大急ぎで家に帰り、制服を着て、足ごしらえもして、升形の方に向けて4人（下宿おばちゃん、幸ちゃん、清遠君と私）揃って走りに走った。電車通を抜け、日新館（本屋）の角を過ぎる頃は幸にも、このあたりは投下されていなかった。無事鏡川縁に着いて後を振り返ると今来た北の方は真赤に空が染まっていた。

間一髪とはこの事である。命拾いをした瞬間である。皆で顔を見合わせてほっと一息ついた。この後、どこに逃げるか迷ったが、沈下橋の北岸を少し西へ行くと築屋敷（今は上町）と川の間に道添いに桑島が広がっていた。そこには既に多くの人々が逃げて来ていたが、安全そうなので、座ることにした。幸にもここには投下は無かったが、少し下流には川にまで弾は落ち、川で焼死した人も多く出た。こうなると運としか言い様の無い状況である。ここで寝ころんで一夜を明かした。

寝て空を見ていると、B29（米軍機）が一機、頭上に現われて北の方へ向かったが相当低空飛行で姿が不自然に感じた。間もなく更に下降して遂に轟音と共に北方に墜落した。この時はここに落ちたらと一瞬ぞっとしたように記憶している。後で見に行ったが、電車通の上町二丁目辺りであった。又、南東の筆山の方角に目をやれば、松林の間に次々と弾が落下し、その度に樹木を照らし木の姿を立体的に浮き上がらせて、美しい情景を作っていた。この不幸な事態の中でも、この時だけは妙に美しさに心を奪われた事を今でも鮮明に記憶している。

幸にも真夏の為、寒さは全く感じないで夜明けを待つことが出来たが、右も左も同じ様な境遇の人ばかりに見えて、妙な連帯感が芽生えた変な気分の夜でもあった。余り眠ることはできなかった。

下宿の主人と別れた3人はこれからどうしようかと相談した。実家（生まれ故郷）へ帰る前に先ず見たいと思ったのは、墜落したB29の残骸である。昨夜逃げて来た道を北へ向かい電車通りを西へ行くと、南側でそれをすぐ見つけた。この時代は敵に対しては強い敵愾心を持っていたので、つい「ざまあみろ、やったあ」等、口の中で叫んだ様に思う。そして何か戦利品の様な物は無いもの

かと物色した。幸にも持ち帰れそうな直径5～60センチの浅い鍋状の破片と、燃料パイプらしい細長い管状の物が見つかり、持ち帰ることにした。これは久重まで持って帰り、後日活用して喜ばれた。

升形を北進する間も両側の焼け跡はくすぶり続けていて、熱い熱いと言いつつ少しでも熱を受けないよう工夫して歩く。所々に逃げ遅れて一命を落とした姿を目の当たりには涙を催す。下宿は跡形も無く焼け落ちて、何も取らずに走り逃げた事を悔んだことである。その後3人で円満橋を渡り、刑務所（ここは焼けていたか記憶に無い）の横、桜馬場を通り抜けると校舎が見えて来た。ここは木造造りでは無いので、そのままの姿で建っていた。先ず運動場等外廻りを見て回ると、落ちてる落ちてる焼夷弾の林立だ。不発弾らしい物もあり、注意して見る。更に校舎に入り、屋上へ急ぐ。ここにも焼夷弾、中には堅い屋上のタイル状の床にめり込んで立っている物もある。これでも直撃を受けたら、“イチコロ”だと話し合った。焼夷弾を良く見れば落下する時、方向を保つため、6～70センチのテープ状の綿で作った尻尾の様な物が付けられていた。これを取り外して持ち帰った。戦時は殆ど綿製品は無かった時代。貴重な布である。縫い合せてベルトを作ってもらったと思う。学校を後にして我々は熱さを避けつつ只管東へ東へと向った。電車通添いに国道は通っているので、沢山の罹災者が疲れた格好で歩いている。誰もが口を聞きたくない様でただ、これから頼れるであろう土地を家を目指して歩いている。陽が昇るとだんだん暑くなるので大変な旅であった。それでも所々で炊き出しをしてくれて、握り飯をもらったと思う。何しろ昨夜から何も食べる物は無く空腹は極に達していた。当然後免町駅行きの電車は走っていないので、そこ迄は歩くしかない。後免～安芸間は多分運転しているだろうと思って歩く訳である。時々荷台満員状態に人を乗せたトラックが通るが、乗せてもらえそうな余地は無いが車が来る度に手を振ってみる。虚しいが、今度こそと呼んでみる。領石通で一休みしている時少し余裕のありそうなトラックが来た。大声で呼び掛けると、幸にも止まってくれた。地獄に仏と思った瞬間であり、急いで飛び乗った。ありがとうと口の中でつぶやく。後免町駅に着いたのが9時だったか10時頃か、憶えていないが、沢山の人人である。何時迄待って乗ったかも記憶にない。此の時代には後免（国鉄後免駅）安芸間は高知鉄道（通称コーテツ）が走っていて、私が小学1年生の頃は汽車とガソリンカー（現在の自動車）が走っていたが、燃料不足から、この時はもう石炭も不足していて、木炭も使っていた様に思う。長い間待ち、やっと乗ることが出来た。ほっとして列車で始めてうとうとと眠る。手結で、清遠君は下車、彼は細川出身で駅から徒歩で1時間以上かかる我々と余り変わらない道程である。やっと西分駅（この頃は和食駅は無く西分の次は赤野だった）に着く。相当疲れていたとは思いますが、まだ十代の若さだし、北を見ればあの山の向うは我が家で、家族皆が待っていてくれる。早く帰って安心させたいと休まず北を目指す。

20分程歩くと馬ノ上、ここからは山道だ疲れていてもここ迄来れば何となく元気が出て来たように思う。もう少し登った所には多分“やまもも”がある筈だ。何でも良い、口に入る物があればありがたいと思う。しかし、もう盛りを過ぎた“やまもも”が一杯道端に落ちている。残っているのを少し口にするが、期待外れで諦める。一緒に帰る幸ちゃんとは4つ年上の姉の様な存在でこの苦況の折と一緒に行動できたことはどれ程心強い存在であったことか。帰れば家はお互いに隣りで、小さい時から姉弟の様に育てられた間柄である。

坂道を登り松林の間に開けた所がある。大休場（オオヤスバ）と言って久重の人々が浜行き（山を

下りて和食に買物に行く様をこう言った)して帰り道にここ迄登って来て、ひと休みする場所で、馬ノ上、西分、和食そして海辺の松林を一望できる、この山道一番の名所と言うべき憩いの広場である。大休場を過ぎると道はなだらかで山の尾根を北へ進む、しばらく行くと右下に菖蒲ヶ谷の池が見えて来るが、この池は馬ノ上北部の台地に広がる水田用の灌漑水の溜池である。ここからは北の方に角石(カドイシ)の家並が見えるので、渴いた咽喉を潤す井戸水をもらいたいと急げる場所でもある。この日はここで北を見ると人影があり、家の下の田圃でどうやら田植をしているらしい。人影が見えただけで一気に安心感が強まる。ここは又進学後、たまに帰省する時冬場には車を降りて北に向って歩く時、日が暮れて道が見えにくくなる場所。そんなときまって母親が迎えに来てくれて、家の上の高台で松明の火を振って待っていてくれた所。この日は昼間だが、若しや母達が田植をしている姿では無いかと胸にぐっと込み上げるものを押さえつつ道を急ぐ。近づくとやはりそうだった。この田圃は親戚の土地で、今日は“結い”で田植に来ているとの話、弟も来ていて、無事に帰ったことを喜び皆で涙を流さんばかりにして迎えてくれた。通信手段の無い時代なので、心配しながら西の空を見ていたとか、ここからは高知の街は見えないが、空は見えるので「今日の空は普段とは違うぞ」と皆で話し合っていたとのこと。この時の家族との対面の情景は時々思い出す遠い昔の思い出である。時刻は2時か3時頃だったように思うがはっきりはしない。時計は持っていなかったが、誰か持っていたか、不明である。

食べる物は何も無く、又してもやまももをと思う、幸にもここには時々食べたことのある木がある、やまももは一度声を掛けておけば、何時でも食べられる土地の風習があり、ありがたい、腹一杯食べてやっと空腹を満たすことができた。幸ちゃんは先に家に向かったが、私は田植の終るのを待ち、家族とやっと家に帰り着いた、夕方であった。疲れていたし、ねむいが昨夜来の物語のような顛末を話し、床についたのは9時頃だった。

(下宿の事)

母の遠縁で、道家からこの方のご主人が養子に行っていたが亡くなり寡婦となっていて、下宿屋をしていた。代々と言うように、当時は主として香美郡出身の人達を泊めていた。

私は18年の春、幸子さんの弟(高知工生)2人で下宿、その時もう1人国光出身の人と3人だった。戦時中は次々と年の上の人(上級生)より順番に学徒動員と言って徴用されて、工場や軍事用工事等に従事させられていて私以外の2人は19年度末で下宿を引き払っていた。その後新しく2人が来ていた。

清遠君(私の一年下の同校生)と幸ちゃんが下宿し20年4月から同宿だった。幸ちゃんは病院でお手伝いをしながら看護婦になる為、夜間に看護学校に通学していた。つづらお谷の住居は私の隣と言う間柄。

(2) 久重も戦場であった(その一)

20年の終戦前の半年間は様々な事件が発生している。大屋敷に爆弾が投下されて怪我人が出た。集落の一番上の家、小松さん宅の近くで、奥さんが胸のあたりに破片が当たり和食の医者に運ばれたらしい。この話は弟から聞いたが弟は丁度この日に、姉が高知から帰ると言うので迎えに高知迄行き2人で荷物を運んで帰宅した時、この情報が伝わり、大屋敷迄見に行ったとのこと。その時警察が来て

大きい穴になった投下爆発跡を採寸していたのを見たとの話である。その後、家に帰る途中少し下の^{シモ}方にある、オソゴエ地蔵の所迄来た時、又大きい爆音がしたらしい。これは先の爆弾と同時に投下された、不発弾と思われていた弾が爆発したものとのことで、後日、不発弾と思われていた弾は実は時限爆弾ではなかったかと噂されたと言う話である。

この話に出て来る弟が姉を迎えに高知へ行った事……実はこの姉は1年程前に高知市旭町に当時あった高知製紙に徴用工として働かされていた。ここでは当時極秘の物を造っていた。それは「風船爆弾」と言う名の兵器で、米大陸迄飛ばして爆発させて、被害の大小よりも人心を攪乱させる目的だったとか…高知製紙ではこの風船用の紙（上質の和紙）を蒟蒻糊で張り合わせて、大きい風船を造る作業をしていたとのことで、帰宅の折にはこの紙の一部（不使用分）を持ち帰っていて、随分丈夫な紙が作れるものだと感心した憶えがある。後年聞くとところによると、この爆弾は2～3発アメリカ迄届いていたらしいとの話である。

又前のページに書いた、飛行機（B29）の破片は戦後盛んに行われていた、芋を用いて作られていた密造酒の焼酎造り（この手の密造酒は70年過ぎた今頃は話しても良いかと禁句だったものを敢えて書くが、久重、羽尾は勿論当時は上八川でもやっていたとの証言も有り、もう罰せられはすまいと書く…）この製造過程で冷却水を使うが、この時の冷却用具として至極便利であった。この頃金属類は貴重^{シモ}の時代、終戦直後には鍋釜もまだまだ新しい物は出回っていなかった。

（3）久重も戦場であった（その二）

爆弾の話はもう一件ある。

高知で焼け出されて家に帰って来た私は、連日田畑仕事の手伝いに明け暮れていた。或日、母、弟、私の3人で、十二所神社の下の方にある通称ツルバと言う田圃で稲の草採りをしていた。小休止して横の谷の端にある梨を食べようと弟が木に登り採って投げた梨を下に受けとる作業（？）をしていた。その時西南の上空（馬床～瓜生谷の方角）に米軍の戦闘機が低空で轟音と共に現れ少し方向を変えて南東（つづらお谷の方角）に飛んで行った。山の峰を越える時ちらっと爆弾を投下する様子が見え、直ぐ光り、続いて爆音が谷間をつんざいた。その時我々は、つづらおがやられたと思った。本当に心配した。勿論大屋敷の爆弾の後でもあるし久重には兵士も駐屯しているので投下はあっても不思議では無い時期のことである。後刻この様子は少し下流方向で草採り中の谷山（雅）さんの父や、用地谷の道の下^{シモ}の田圃跡で松根油採集作業をしていた、父と坂本さんも目撃していて随分心配したとのことであった。しかし、帰宅してみると、つづらお谷は無事で、南の山を一つ越した、コオリヨウ谷に落下したらしいとの事であった。

父達が採取していた松根油と言うのは、当時石油不足の日本が窮余の一策として航空燃料に向いているとの理由から、松の木を割り大きい乾留釜に入れて、乾留し、油分を取り出す作業をしていた。この為山の松の木は片っ端から、大きい物から伐り出されてこの谷に集められていた。戦時ならではこのこの田舎に無い風景であった。

父は兵役は対象にならない（徴兵検査により甲種、第一乙、第二乙位迄は早く召集されたが以下は召集されなかった）ランクの為家にいたが、前記終戦の直前1週間か10日位召集されていて終戦直後に復員（帰宅）して来た。

(4) 震洋隊の事件

彼等は私が空襲後に久重に帰っていた頃、何度か休暇を利用して遊びに来ていた。住吉の浜辺に駐留していた海軍の少年兵である。年齢が同世代であったこともあり、急速に友達の様になっていたと思う。詳しく話せない時代ながら、あらしを聞くと、小型の舟艇に爆薬を積み攻めて来る敵の艦艇に向けて体当りで突っ込み爆破すると言う特攻隊の役割で、毎日その訓練をしているとか。生死を別ける極限の世界に生きているような日々かと同情したものである。私もこの時代には、行く先は戦場と割り切って将来は陸士か海兵を目指そうと、この中学に進学していたこともあり、共感できたが、今まさにその真直中にいる彼等には一抹の同情はあった。言葉は悪いが、この時代に既に自爆テロに近い思想が軍の上部にはあって現実には特攻隊員は主として航空機によって敵艦に立ち向かっていた。今では考えられないおそろしい時代であった。

彼等が志願したのは海軍の飛行予科練習生で、当時これに甲、乙種があった。甲種は中学3年終了で受験出来た。又乙種は高等小学校(2年)卒業で受験出来る。実は弟も陸軍の少年兵(飛行機乗り)に志願したらしい、落ちて良かった。後で聞いた話ではあるが、誰もが、若い男達は戦場に行けないのは恥だと考えていた時代のことである。

8月15日に3人で又訪れた。10時だったか、2人は我々と一緒に川へ行き泳いだり魚を追かけたりして遊び、昼食に帰って来た正午過ぎであった。帰るなり、1人残っていた彼等の1人が日本は負けたぜ、今さっきラジオで天皇陛下の玉音放送があり、無条件降伏したよと言って、涙声で話した。一同はその時は本当に悔し涙を流した。

大人はほっとした様子で、これで兵隊さんが死ぬ事も無いし空襲も無く、本土上陸も無いぞと喜んでいた。一方彼等は落胆して、大急ぎで隊へ帰って行った。

しかし、これが彼等との最後の別れとなった。今でも時々昔の事を思い出すが、戦争と言う悪しき記憶である。と言うのも、この後翌日に大事件が起きたのである。

8月16日何時頃だったか憶えていないが、南の方で、大爆音が何度もした。異常な大音である。ここ迄聞こえるとは……原因は不明だが、後日聞くとところによると住吉に駐屯していた海軍の兵士が艇と共に多数爆死したとのこと、直ぐ浮んだのは彼等3人の顔である。この中に含まれていない事を祈る……が後日聞くとところによると111名が犠牲になったらしい。殆どが若い訓練生だとか、昨日終戦となり、その翌日ではまだ立場上、心の整理が充分ついていなかっただろうとも考えられるが、少なくとももう特攻として出撃することは無くなり命をかけた使命は終わり、生れ故郷で待つ家族の元へ帰ることになったと少しずつ心の変化が芽生えていただろうに……と思い心の痛んだことだった。

皆でどうしてこんなことになったのかと話し合い、短い付き合い乍ら悲しい事態になったことを悔んだものでした。

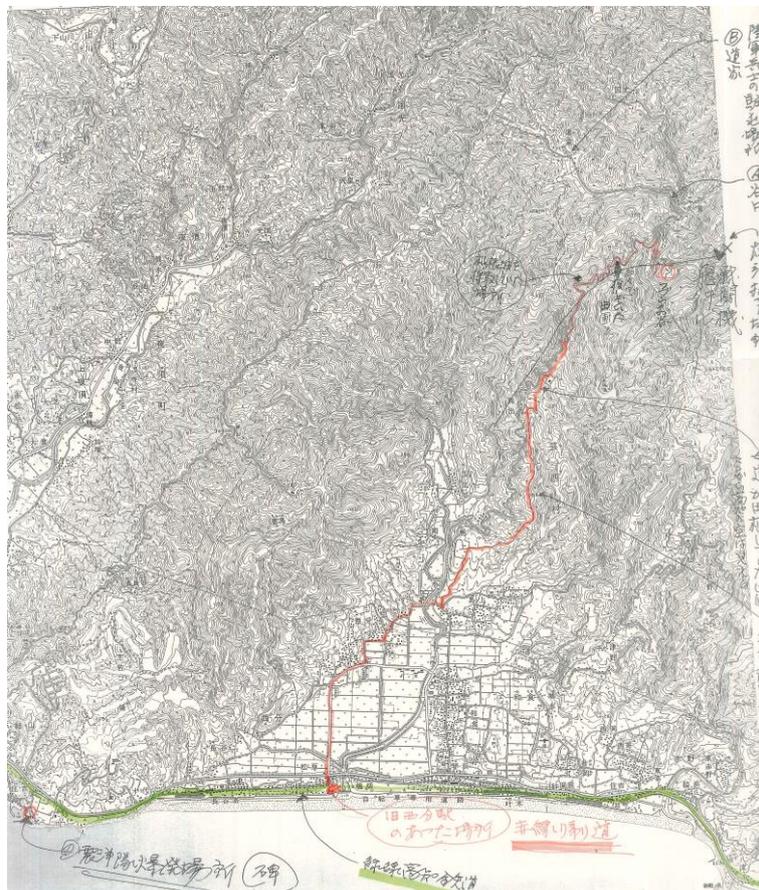
弟の話によると、この事件で九死に一生を得た1人の兵士が足に怪我をしていたとも言われているが、住吉に残り、この地の娘と結婚して住みついているらしいとか。子供も2人育てている。亡くなった友を弔う役割をしているとか……。どう言う形で始まったか私は知らないが近年迄、毎年この地に建てられている慰霊碑の前で、8月16日に慰霊祭を行っていた。私の知人(故人)もこの日は「必ず行きよる、参加している」と話していた事を思い出した。

(5) 久重にも陸軍の兵士が駐屯していた

終戦の前、何時頃であったか記憶が定かでは無い、と言うのも、私は学業のある間は高知で下宿住いであったから。久重にも一時陸軍の兵士が駐屯していた。小隊の単位（人数）をはっきり知らないで申し訳ないが、一隊は加重の谷口に2軒空いている家があってここに10名位いた。又、道家にも同数位はいたらしい。この双方を束ねる形で隊長らしい士官が1人いた（少尉か中尉）。先にも書いたが、20年の春頃からは本土決戦と言う言葉が飛び交っていたように思う。これより前は我々少年の間では、神風が必ず吹く、昔元寇の折神風が吹き、元の軍勢が玄界灘で海の藻屑と消えたと言われる故事に由来する話ではあるが、子供の頃は良く言われていた。可成り大きくなる迄信じていた様だ。（サントクロスの如きものかな）これは今の台風が丁度、九州に上陸して海が大荒れして元軍が被害者になったためと思われるのだが……。

結局神風は吹く事なく、本土に米軍が迫った訳である。その為土佐湾も上陸地点の一つと考えられて、陣地を作る作業は高知沿岸の各地で行われていたのである。久重もその一つとなり陸軍の兵隊が来たのであろう。

我が家にも休みを利用して1人の一等兵が時々来ていた。彼は室戸出身で30才代、川の漁にも詳しく色々なことを話し又、やっていた。その中で最も不法ながらダイナマイト（工事用か軍の備品かな…）を川に投げ込んで魚を採ることを子供に教えたりしていた。と言うより、子供と一緒に川に行き案内させて、魚のいそうな場所でこれを使って魚を採った。我々も面白いので彼について川へよく行った事を記憶している。いけないことだと知りながら……。これも戦時中の悪しき思い出話である。この兵士達は結局、何の役にも立たないまま終戦後に何時の間にか消え去っていた。



(国土地理院発行地形図より作成)

3, 演芸会の思い出

(1) 谷山好一氏と演芸会

谷山氏の生れは、旧高知県香美郡東川村久重。

場所は、通称「トネ」、山中家の被官の墓の手前の道の下に家があった。

私と好一さんとのつながりは、私が旧制中学に通っていた昭和18年～24年（途中で新制高校となる）終戦直後、久重には兵役からの退役者、外地・内地（都会）からの帰還者で、一時的に人口は増えていた（確かな数迄は覚えていないが）。この頃、この地区ではまだラジオさえ各戸に在る訳でなく、楽しみは、夏は川漁、冬は山で小鳥を採ったり位のこと、春秋の山菜採りは女性も参加するものの、楽しみになるものは非常に少ない時代であった。

ここに軍隊から帰還した谷山さんが、夫婦で取り組んだのが「演芸会」春休（3／末、4／初）夏休（お盆の頃）2回公演していた。その為に開演前4～50日頃より毎夜旧小学校舎に集合して練習をした。その指導者が通称「コウヤン」事、谷山好一さんで、夫人の「ノブチャン」信子さんである。

出演者は主として加重、つづらお、道家、大屋敷だが、遠い板淵からも好で参加した人がいた。芝居、舞踊、寸劇、等々、観る人達は、馬ノ上、和食、西分、羽尾からも来て、学校は一杯になっていた。

これを夫婦で教えていた訳である。私も学校で演劇部に参加していたので、22～23年には双方に参加していた。就職後は帰省時には必ず一晩この家に行き長話をして師弟の関係に在った。勿論兵役前には国内で（久重を出て）勤めていたらしいが、この点は詳細に聞いていない。殆ど農業で収入のある方で無く、帰還後は炭焼きが主たる仕事だった様だ。久重にバスが通っていた頃は、県森連に通い、そこの役員をしていたと言われている、久重にとって大事な人の1人である。

(2) 昭和21年～25年頃の演芸会について

（当初には谷山氏は未復員）

思いつくままに記す。谷山氏との記憶は

出し物 正統的な物は

岡本綺堂の俳諧師

菊池寛の父帰る

瀬川如皐の与話情浮名横櫛（通称切られの与三郎）

寸劇で紅葉の金色夜叉

その他、お笑い等多数

女子の舞踊や、やくざ踊り（良く流行した）

○長崎物語（蝶蝶夫人・マダムバタフライ）他沢山。

映画主題歌を中心とした当時の流行歌を題材にした創作舞踊を（谷山夫人が）振り付けして、青年団女子が踊り好評

○やくざ踊り（所謂股旅物）

名月赤城山、勘太郎月夜唄、お島千太郎旅唄、国定忠治物等多数

※写真は昭和21年3月の物と思われる（「地域記録集土佐の村々4 香美郡久重山村」P17 掲載）

谷山好一氏は復員前か、写っていないが左端に立っているのが、谷山信子夫人

中央着物の舞台姿の女性は当時の大スターと呼び声の高かった「山村ふみ」さん（加重出身）

○演芸会は相当昔から夏休み1回はやっていた。

校友会余興として始めたらしい。

（3）海南中学演劇部について

海南中学演劇部の初公演の折の全員の集合写真あり、堀詰座（S22、10）

女子は高知高女の賛助出演 ※県立高知高女は第一高女、第二高女が合併してこの名になっていた。

戦前は男女別々の学び舎で、戦後この様な形で一緒に出来て、練習の時間も大変楽しい思い出のひとつとなった。

この外、高知女専（女子専門学校）後の高知女子大と言う学校があって、こことはコーラス部で、一緒に公演した。写真もある。NHKでラジオ放送もした。

演劇は23年1月に高岡町（土佐市）に行き、公演した。部長がこの出身で、是非出身地で土地の人達に観て欲しいと行ったが、何に乗って行ったのかと今では思い出せない。交通不便の時代のこと。



中受の和服姿類かむりが私。
劇は外題か「息子」ふ内業作
メウヤ姿である

堀詰座
昭和二十三年十月

4, 廃校の同窓会

◎以下の文章は、令和元年（2019）開催「第31回久重会」の配付資料を基に作成した。

（1）久重会の30年

久重会 どうして生まれ長続きしているか

久重会発足までの経緯とその30年

久重会を始めるきっかけは、昭和51年春、明治以来長年この地の出身者の心のより処として存在した、久重小学校の廃校です。

多くの卒業生がこの日、悲しみを抱いて、校舎に集い、別れを惜しみました。その翌年からお互いに声を掛け合い、春の花見の季節に校庭に集まり、昔話に花を咲かせました。その輪の中心におられた方が坂本幸子先生です。3年程続いたでしょうか、当初30名位はいた参加者が年々減り、自然消滅的に開催を続けられなくなりました。何とかして長年続いたこの山里の絆を守り続けたいと言う願いを皆が持ちながらも、過疎化の進む地区でまとめ役として行動できる人はいなく、年々寂しい状態が加速していきました。それでも坂本先生は常に何とかしたいと言う気持ちを人一倍強く持ち、希望の火を消すことなく、花見の会の存続を願い続けていたようです。一方私は高校卒業後勤めた会社で、高知を皮切りに松山、彦根、京都、奈良、高松、久留米と18年間転勤を重ね、閉校時の前年の春、高知に帰り勤めていたので、この会合に参加することができました。先生との交流の始まりは、久重小学校に私が入学した昭和11年の春です。1年～2年生の間、担任の先生として、多くのことを学びました。在学中は久重小の先生としての勤務でしたが、その後、近隣の学校に次々と異動されたようです。そしてこの閉校の時にはご主人（一度は久重小学校の校長もされたことのある先生）と共に退職後の生活を当地の白木山（国光）地区で過ごされていました。ここには時々お伺いしましたが、山里が次第に寂れることが、何時も出て来る話題の一つであったと記憶しています。その折必ず私に、花見について「誰もやってくれそうな人はおらん、あんたがやらいで誰がやるぞね、何とかしいや」と言うのが口癖となっていました。それでも、私はまだ勤めのある身で時間は取れないし、今後の転勤も予想される中で、高知にいて、久重での会合をお世話することは出来ないとおことわりしました。

一方で、私は幼い頃、祖父がこの久重山の地区の大総代と言う役（町内会長と民生委員を兼ねたような役割）をしていて、その姿を記憶していました。家業は農家で果樹（みかん）園芸や、当時盛んに行われていた養蚕の指導者としての役割も見て育ちました。何時の日にか私も祖父のような人様の役に立てる人にならねばと心に秘めていた訳で、この時このことが蘇って来て、先生に「もう少し待って下さい。定年になればきっと先生の意向に添わせて頂きます。」と約束しました。その後は又別の会社に70才迄勤めた訳ですが、先生との約束を守ることにしました。絶対守らねばと心に決めて、先生のお宅をおたずねしました。「これからはお手伝い出来るようになりましたので、やらせて頂きます。」と言い、喜んで頂いて、今後の取組みの相談を早速始めました。その日までに少しは腹案を用意していたので、先ず参加されそうな人達を集める為の名簿作りから始めることにしまし

た。お互いの友人、知人、親戚等あらゆる「つて」を頼りにこの作業を急ぎましたが、当初の予想をはるかに超え、2倍いや3倍程の100名を超す人数が集まり、今度はこの多くの人達をどうやってどこに集めて会をするかと言う難問に行き当りました。これが苦労の始まりでしたが、一方では大変楽しみもある苦労となりました。

結局、久重での開催は断念し、最も近くて広い会場のある海風荘に決め、年内に開催したいと11月19日に行う運びとなり安心しました。

第1回は誰にも手助けしてもらおう訳にはいかず、100名の参加者が会場に無事着席してもらえ、返りは心配の連続であった事は言う迄もありません。受付けを誰にするか、写真も撮りたい。先生方には花束を贈呈しよう。久重小学校同窓会の看板も、等と次々と手を広げ、自分自身を苦しめましたが、それもこれも今になれば楽しい思い出です。第2回よりは沢山の友の援助で大変たすかりました。

初回を終えた後、参加された皆さんから今後の事をどう考えているかと言う質問が多くあり、来年は久重でやれないかと意見が沢山出て来ました。まだ小学校の校舎が使える状態でしたので、勢いで来春桜の花の頃やれとの声に押されて次の会を決めざるを得ませんでした。この事が平成に30回開催し続ける手始めになった事は言うまでもありません。しかし続けているうちには様々な問題も起きて、もう止めようかと思っただ事が何度もあります。しかしその度に支えてくれて来た、友人や家族等よりの心からの応援があり、思いとどまって続けることが出来まして、今振り返って、今日があると感謝しています。

(2) 第2回以降

応援を頂いた方々（順不同、敬称略）

岡村政子（旧姓茂井） 国沢廸子（旧姓横山）

茂井住子（旧姓山内） 田中茂太郎

物故者

坂本幸子先生

茂井武美、谷山種喜、高松良吉（旧姓茂井）

宇田隆寿（旧姓豊久） 田内節子（旧姓横山） 高橋百合子（旧姓横山）

※2回目以降21回までの記念写真の撮影は、県展特選作家 入野俊三氏に依頼

久重会を続けたのはふる里を思う参加者の心です。

この後私は21回迄世話役をさせて頂きましたが、20年に海風荘の閉館もあり、会場に困りました。かとり、藤そして29、30年と山の家と移り、この間世話役は田中茂太郎氏にお願いしています。後継者選びに大変苦勞しましたが、続けられている事に感謝しています。良い世話役を見つけられた事で、平成を終え新しい令和の時代も1回でも多く開催できるよう、要は参加者が30名以上あることを願っています。ご協力下さいませ。

(3) 第1回に行ったこと

- 1、恩師6名の方々への花束贈呈
- 2、玄関用の立て看板
正面舞台上部に同窓会の横断幕設置
- 3、席順、先生方は特別席として
板淵、宇留志、大屋敷、白木山、道家、加重、つづらおの七集落に分けて表示の上、着席願った。
- 4、集合時刻と開会時刻の間に1時間の談笑時間をとる。
- 5、交通手段は、公共交通機関と海風荘送迎バス利用
- 6、記念写真の撮影「カメラのどと」に依頼。
人数が多く集落単位の集合写真とスナップ。
- 7、受付け係 一番困った問題、人に頼めず
家内と娘に手伝わせて、終了（受付け終了）後は会に出席せず。帰宅させた。私は宿泊。



久重会の三〇年



つづらお出身の参加者

久重会
どうして生まれ
長続きしているか

令和元年5月19日
梅木昭和

公開：令和3年（2021）2月

著者：梅木昭和氏

編集：高知県立高知城歴史博物館

※無断複写（転用・転載）はご遠慮ください。